



グローバルゼーションの中の 多極化

谷田貝 豊彦

(宇都宮大学オプティクス教育研究センター)

グローバルゼーションの波が、政治、経済や文化にまで変容を迫ってきている。あらゆる情報が地球規模で駆け巡り、日常生活にも多大の影響を与えている。よくいわれているように、アメリカの文化が世界の多様な文化を飲み込んでしまいそうである。画一化と均質化が進み、個性のない文化が世界中で形成されつつあるように見える。確かに、アメリカの文化には魅力があり、世界の優秀な頭脳をひきつけ、ビジネスチャンスも豊富にある。

科学や技術は本来的にグローバルであるべきである。世界で最もレベルの高いアメリカの大学に世界の才能が集まるのは当然のことであろう。

このようにグローバルゼーションによってアメリカの一極集中化が進んでいるように見えるが、事実はずっと複雑である。ソフト開発はインドの存在なくしては語れないし、多くの製造業の中国依存度は高まるばかりである。このことを大量廉価のキーワードで片付けるのは単純化しすぎであろう。文化人類学者の青木保氏の指摘によれば、「グローバルゼーションによって促されるのは、中心がない多極化」である。多極が相互に響き合って新たな波を引き起こすことこそ重要であるという。

翻って、「光学」の世界はどうであろうか。国際会議の開催数やその参加者の増加、学術情報の電子化などをみると、この学問領域でもグローバルゼーションの波が押し寄せているようである。しかし、わが国の欧文誌への外国人の投稿数、国内の学会への外国人参加者、そして外国人学会員の数、このどれをとっても、わが国の「光学界」のグローバルゼーションが大きく進んでいる状況にはない。

その文化の魅力によってアメリカ一極化が進んだように、光学界のグローバルゼーションには、わが国独自の“光学文化”の魅力が必要である。さらには、多極化の一角を占めるためにも、独自の“文化”が必要である。

かつての光学界には、ドイツ文化やフランス文化、イギリススタイルやイタリアス

タイトルがあった。ロシアも明確な個性があった。論文を読むと、著者の国籍や研究国が想像できた。何人かの巨人がいて、各国の“文化”を代表していた。これらの巨人がいなくなって、グローバリゼーションが進んだように見えることは皮肉である。

さて、グローバリゼーションの中の多極化で、わが国が新しい波を引き起こすために何をすべきであろうか。そのためには、個性的なわが国独自の研究テーマの設定、魅力ある光学コミュニティーの構築、高い研究能力をもった研究者・技術者の養成など、地道な取り組みが必要であろう。

今回、日本光学会の幹事長を務めさせていただくこととなった。グローバリゼーションの波の中で、日本光学会が多極化の一極を占め、その波に飲み込まれないためには、どのような対応が必要であるかを考えてみたい。日本光学会がローカルな学会にとどまることなく、国際社会に貢献するためには、どのような対応が必要であろうか。いくつかの提案をしたい。

- (1) 光学会で行われている企画の抜本的な見直し
- (2) OPJ や光学シンポジウムの国際化の検討
- (3) 外国人会員増への取り組み
- (4) 海外からの OR 投稿増への取り組み
- (5) 海外学界（特に、中国、韓国、台湾、シンガポールなどのアジア諸国）との連携

など、従来からの取り組みをさらに強化する必要がある。

さらに、国内の学会体制の見直しも必要であろう。特に、海外から日本の光学界を見て指摘されることであるが、わが国の学会体制がよくわからないといわれる。日本光学会、レーザー学会、分光学会等々、小学会の多極化状態である。ここでも、多極の協調が必要であろう。

そして最も必要とされるのは、質の高い研究成果を通して「日本の文化」が発信できる日本光学会でありたい。

学界もグローバリゼーションの波を受けているのである。日本光学会にも火急の対応が求められている。皆様のご協力を得て、個性のある日本光学会を作ってゆきたい。